

2009.7.25

2009.7.25

西帰浦から倭館、そして忘憂里の丘へ①

足立 龍枝

はじめに

奈良在住の廣岡富美さんが、画家李仲燮（イ・ジュンソプ 1916~1956）と詩人具常（ク・サン 1919~2004）との関係を詠まれた短歌5首を行書体であげています。

廣岡さんは植民地時代韓国の浦項（ポハン）に住んでおられて、女学校3学年のとき敗戦、帰国されました。

韓国にこだわりを持ち続けその気持ちを短歌で表現し、歌集も多く出版されています。

また、韓国の時調（定型詩）を翻訳し、日本に広められた方でもあります。

〈西帰浦、李仲燮美術館〉

今年は「丑年」、年賀状の中に李仲燮の「角つく牛」を印刷した人がいた。

韓国の近代洋画家 イ・チュンソブ

「叫ぶ牡牛」の黄色の荒し

目ん玉を 大きくヒン剥き 荷車を引く

牡牛を描く 畫家のありたり

黄土色の タッチ荒々と 牡牛を描きて

画家は己を 減ぼしてけり

むくげ通信231号、飛田さんの「濟州島。李仲燮美術館が、とてもいいです」を読んで驚いた。何と5、6年前の西帰浦ウォーキング大会に参加したとき以来、時々利用しているホテル「グッドインホテル」と美術館とは目と鼻の先だった。美術館からホテルが見え、直線にして100メートル足らずの近さだ。

これは、行かなくてはと思い立って、今年4月「濟州島菜の花ツアー」と名づけ、美術館をコースに入れて2泊で回った。

美術館については、むくげ通信に詳しく書

かれているので省略。私が関心を持ったのは、1955年6月、韓国と日本と離れ離れに住まざるを得なかった夫人・山本方子（韓国名、李南徳）が、李仲燮の親友、詩人具常（ク・サン）に夫の消息が分からぬとい、悲痛な思いで出した手紙を読んだときだった。胸がつまる手紙だった。

詩人・具常については、何年か前廣岡さんから購入を依頼された詩集シリーズの中の一人だったので、そのとき知ったのだが、日本語でも3人詩集が出版されていて、なじみの詩人のようだった。

‘인간 具常’



方子夫人の手紙はパンフレットには出でていないし、図録にもない。美術館の優しいお姉さんに頼んだが、当然写真はダメだと言われたので書き写すしかない。30分かかって書いた手紙の一部が次の文。（手紙は縦書き）

具常様

何時の間にか六月も残り少なに、本格的な暑さが近づいて参りました。……略……

実は、先日もお便り差し上げました様に主人から三ヶ月以上も音沙汰がなく、それはそれは心配致しております。貴方様へと同時に서울の方へも二、三のお友達へ問い合わせましたところ、只一人の方より大邱で制作中らしいとのお返事があつたきり、それも確かな事とは判らないそうです。……略……病氣でもしているのではないかとそれのみ案じております。

それとも統営の方へ行っているのかも知れないとも考へ(え)ておりますが、どっちにしてもこんなに長く消息の判らない事は、今迄にありませんでしたし、まして、近く渡日出来るとの一点張りの返事でしたので、日韓の関係が日増しに悪くなる此の頃、それもうまく行かず、主人も絶望的な気持ちになっているのではないかと思は(わ)れます。……略(子どものことが書かれている)……

私からの手紙を果して受け取っているのかどうかそれも判りかねる状態で、色々想像すればする程不安が大きくなるばかりです。

生活力も旺盛で、一人で何でもやってゆける人なら少々便りはなくとも、そうは心配にもなりません

が、御存知のような人柄で、ましてあの様に神経のもうい人では、一日でも離れては不安なのです。

病氣さえせずに元気にいてくれれば、後の事は信じ切っている私ですから辛抱強く待っていることも出来るのです。それでひとつお願ひがございますが、主人の消息について、確かな事をくわしくお報せ下さいませんでしょうか。……略……

(1955年) 六月二十二日

方子

この手紙のすぐあと入れ違いに、李仲燮から方子夫人あてに手紙が届いた。

1955年ごろは、個展も開いていたが、心身ともにぼろぼろになって精神病院に入院していた時期もあった。李仲燮が亡くなる1年前のことだ。



종이에 잉크와 색연필

〈倭館の具常文学館〉

李仲燮より3年後に生まれた詩人、具常の故郷は、咸鏡南道元山だが、1953年から20年間住んだところが、慶尚北道倭館（ウェガン）だった。そこに文学館が建てられている。

京釜線倭館駅に近いことも分かってきたので、普段に行くときに途中下車をして立ち寄ることにした。

洛東江（ナクトンガン）沿いの倭館へは、司馬遼太郎の「街道を行く 韓のくに紀行」を手に河川敷を歩いたことがあるが、文学館はその方向とはちょうど反対、江辺を南方向（下流）に行く。

駅前の大きな周辺案内図に「具常文学館」と示されている。待合室兼売店になっているところには、具常の詩が2編も額に入れて掲げてあった。しかし、売店のアジュモニは、そんな詩人知らん。架かっている額も見たことないという顔をした。出札口のアジョンシ二人も文学館がどこにあるのか知らない。案内板は初めてみたようだった。

ネットで調べたメモを忘れてきたので、仕方なく、地理を思い出しながら大体の方向に

向かって歩き出した。

と、そこに郵便配達のお兄さんが現れた。この人ならと尋ねると、文学館の方向を指差して「歩いて1キロメートル」だと教えてくれた。15分ぐらいかなと検討をつけた。

歩き出して20メートルほど行ったとき、後ろから大声がする。「700メートル」だと叫んでくれている。決して「テーゲー（大体）」でも「クエンチャナヨ」でもない。こちらも手を挙げて「コーマッスムニダー」と呼び返し、思わず頭を下げた。素敵な青年だったなあ。私を呼び止めたとき「ハルモニ一」って言ったのか、「アジュマー」と言ったのか、大きな問題だが記憶にない。

洛東江の堤防が見え隠れする近さに平行して続く道路を行くと、700メートルのところに白っぽいコンクリートの文学館が見えてきた。

駐車場も取れる広い敷地（資料によると500坪弱）の半分ぐらいが建物になっている。



真南の家は崩れそうな横長の敵産（日本）家屋。人は住んでいないようだったが、植民地時代このあたりはどういう日本人が住んでいたのだろうか。京釜線に近いので鉄道関係者が早くから移住していたのかもしれない。

文学館開館は2002年。国と郡との共同出資で完成したものだ。完成直後に訪れた廣岡さんの話では、まだ展示品も少なかったそうだが、現在はあふれんばかりの資料だ。詩人具常の交流の幅が感じられる。

具常は、日本の植民地時代、日本大学専門部宗教科を卒業している。

フランス文人協会が選んだ世界文人200人の一人でもある。

朴元大統領とは親友だったと女性職員が教えてくれた。朴正熙からの手紙が展示してあった。……（第236号に続きます）……